

【実践報告②】

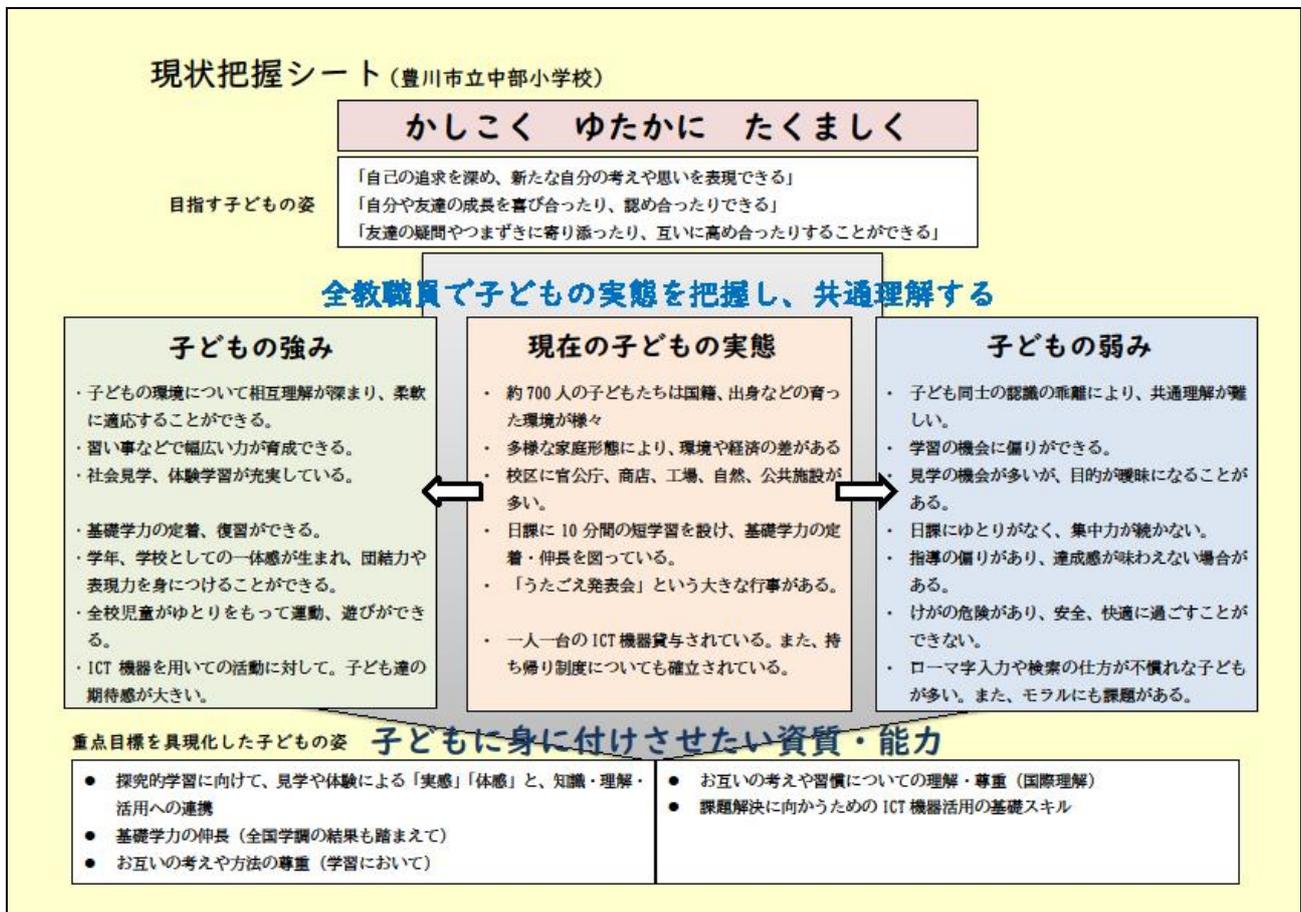
仲間とつながる授業で学びを深める中小っ子

豊川市立中部小学校

1 はじめに

本校は県東部、豊川市の中心部である諏訪町に位置している。地理的な条件だけでなく、市役所、警察署、消防署といった、行政や防災を担う施設や、商業施設、住宅地、鉄道や幹線道路にも隣接した、市民生活においても中心にある町の学校といえる。そのような立地において、児童らは、学校目標である、「かしこく、ゆたかに、たくましく」あろうと、日々過ごしている。本研究を推進していく中で、今一度、本校の児童の現状を把握しようとアンケートを実施し、SWOT分析を試みた。その中で、以下のような、この地域に在住し、本校に在学していることの強みを発見することができた。一つ目は、校内において、児童数が多いことや、外国籍の児童が在籍していることで豊かな関わりができたり、校外においては、行き交う人々との交流や、多種に及ぶ商業、工業施設が、近隣にあったりすることで、多様な価値観を得やすい傾向にあったこと。二つ目は、習い事やスポーツクラブ施設が比較的多く存在し、また距離が近いために通いやすく、学校外で幅広い活動を行うことができること。三つ目は、児童らは、『うたごえ発表会』をはじめとして、他者から見られ、認められる機会をたびたび得ることで、自己肯定感がやや高い傾向にあったことである（資料1）。

【資料1 SWOT分析による本校の現状把握シート】



これまで本校は、学習の効果を上げる手だてとして、学校や学年、学級といった環境基盤を整えることに力を入れてきた。友達との関係を良好にし、居心地がよくなれば、学習にも安心して意欲的に取り組めるだろう、との仮説の基に「つながる喜び」をテーマに研究実践を重ねてきた。友達と考え方や思いがつながる喜び、それを基に、解けた、できた、分かった喜びを、「笑顔」と称した。そして授業案の中に、その笑顔を実現するための指導の手だてや、教材・教具の工夫である「プラスONE」を記述してきた。今回の研究テーマである「自ら学ぶ力の育成に関する研究」を受けて、本校が進めてきた、「学ぶ喜びの笑顔」が自ら学ぶ意欲につながり、それが本校の目指す力になるであろうという考えに合致し、より本校の児童の力を高められるという思いから取り組み始めた。

2 実践

(1) 研究の概要

「笑顔」は単純に表情だけを指すものではなく、授業の中で見られる期待感や喜びを意味し、私達は三分類して考えてきた（資料2）。A分類の笑顔は、「わくわく楽しみな笑顔」であり、学習への期待感が高まる場面。つまり、単元や教材との出会いの場面を想定し、より魅力的な出会わせ方を工夫しようと努めている。同様にB分類は「友達とつながりを感じた笑顔」で、学習中盤における作業や活動の協働や、意見、考えの共有の場面であり、C分類は「次へのやる気に満ちた笑顔」で、学習、終盤の振り返り、そして次時の予告の場面としている。これらを、AARサイクルに沿わせることで、私たちの具体的な授業づくりに取り入れている。

【資料2 笑顔の三分類とAARサイクルの関係】

A 分類の笑顔	B 分類の笑顔	C 分類の笑
A	A	R
【Anticipation】に対応	【Action】に対応	【Reflection】に対応
☺わくわく楽しみな笑顔	☺友達とつながりを感じた笑顔	☺次へのやる気に満ちた笑顔
やってみたいという期待感	仲間と学ぶ楽しさ 思いを伝えられた充実感 新たな考えに触れたおどろき	内容を理解した充実感 次時への希望を抱く楽しさ
子ども達の笑顔のために、私たちが行う+ONE		
見通しがもてる計画やめあての設定、授業導入の工夫を行うこと。	解決に向かおうとする意欲に応えるために、支援や手だての工夫を行うこと。	学習を振り返り、失敗や成功の要因を探らせ、次の学習や活動への意欲をつなげること。

(2) 実践内容

ア A：☺わくわく楽しみな笑顔について

① 特別支援学級道徳科での場面

特別支援学級における実践では、道徳科「あしたはえんそく」（だれとでもなかよくB〔親切・思いやり〕）が行われた。遠足のバス席をめぐって、自分勝手な言い分を通そうとするうさぎさんに、誰もが気持ちよく参加するためにはどうしたらよいかを考えさせる題材である。授業者は児童らの特性を考慮し、児童の目線の高さで説明すること。そして教材を読み聞かせるだけでなく、ペープサート

を用いて具体物とし、さらに向きを変えると動物達の表情が変わって感情の動きが捉えられるよう、いずれも視覚的な効果をねらった工夫がなされていた（図1）。

② 第6学年社会科での場面

6年生の社会科では、国の政治のしくみと選挙から「他人事じゃない、私たちができること」と題した、選挙の投票率を取り上げた授業を行った。令和4年度の参議院選挙の投票率「52%」の提示を皮切りに、次から次へと数字を列挙していき、これらが何を意味するのかを推測するところから進んでいった。児童らは、数字とグラフが組み合わせられ、その内容が判明するにつれて授業に引き込まれていき、投票率が低いのは自分たちの世代の損になる、といった衝撃的な事実を、どうしてなのかを解明しようと、わくわくしている様子だった（図2）。



【図1 ペーパーサートを用いた学習】



【図2 52%の提示から始まる】

イ B: 😊友達とつながりを感じた笑顔

① 特別支援学級道徳科での場面

登場人物の気持ちを考える場面では、うさぎさんに拒否された隣席の動物達の気持ちについて「表情カード」を用いることで、児童が言いたいことを整理する助けになり、聞く児童らもカードと話者と関連付けて耳を傾けた。また、当事者や相手の立場に擬似的に立ち、より深く自分の感情の動きを捉えさせようとロールプレイをさせた。演技とはいえ、クラスメイトに「あなたの隣はいや！」と言われて悲しい気持ちになり、教材の中の登場人物に自分の感情を投影させることができていた（図3）。



【図3 ロールプレイの場面】

② 6年生社会科での場面

授業の中盤では、世代ごとの行政サービスの差、とりわけ給付金の施行や廃止について、データやパンフレットの資料を基にペアやグループで何度も話し合い、その理由を考えた。学習の途中では、意見交流アプリを用いて仲間の考えを知り、共有することで、同様な意見に勇気付けられたり、異なる意見から視野を広げたりすることができたようだ。

「政治に関心が高いのは年齢の高い人。だからお年寄りに向けたサービスが多い」と高齢者サービスの充実からその



【図4 ペアでトーク】

要因を探り当てようとしたら、「給食が無料だよ」「赤ちゃんや幼い子をもつ人へのサービスもたくさんあるよ」と子育て世代への無償化や給付金の充実気付いたり、自分の気づきや考えを他者にアウトプットすることで自信を得る事ができた。そして「選挙で投票してもらうためには、その世代を狙ったサービスをするのが効果的だろう」と学習の中心である課題の解明に近づいていった（図4）。

ウ C:😊次へのやる気に満ちた笑顔

① 特別支援学級道徳科での場面

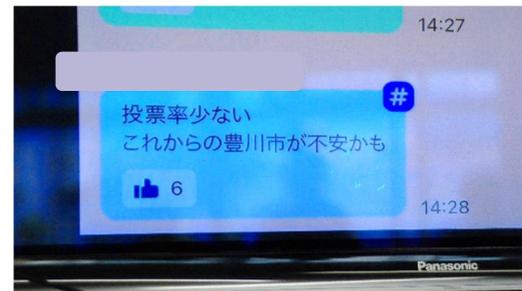
授業の最後では、学習の振り返りとして、うさぎさんに手紙を書いた。登場人物に投影してきた気持ちを、自分という立場に置き換える大切な場面である。手紙を読み上げる場面では、手紙に記述した「なかよく」や「やさしく」といった言葉を抽出し、それを掲示板に添付していくことで、児童らも学習に取り組めた満足感と、穏やかな気持ちに包まれていた。言葉に出すことはなかったが、表情からは、次の道徳の学習への期待感が表れていた（図5）。



【図5 うさぎさんにお手紙を書く】

② 6年生社会科での場面

終盤では、投票率の重要性を理解し始めた児童らに授業者は、次時の授業で用いる市長選挙の投票率である「29%」を示した。「学級委員を決めるのにクラスの三分の二の仲間は関心がなかった」という例えに驚き、児童らは「投票率が低すぎる、私達の町はどうなっちゃうのだろう」などと、タブレット型端末を通して書き込みを始めた。授業終了後にも「やばいかもしれない」「家の人に聞いてみたい」と、アフタートークがあふれ、児童からは本時の満足感と共に、次時への期待感も感じられた（図6）。



【図6 意見共有アプリへの書き込み】

3 おわりに

研究を進める中で、現時点での課題として以下の三つが挙げられた。一つ目は、児童らの何をもって笑顔が見られたとするか、である。先に、表情のみを指すのではないと述べたが、現在のところ有効な検証方法は確立されていない。児童らの活動の様子や発言の内容、ノートや振り返りの資料等を収集し、検討するとともに、県総合教育センターから提示された、「段階図」の活用を視野に入れ、現在準備中である。二つ目は、分類された笑顔が全ての教科に通用するものかどうかである。今後、各自の授業研究や、市教委訪問事業での教科指導員からの助言などから検討し、試行していきたい。三つ目は、本実践では授業の導入、展開、終末に一つずつ「プラスONE」を設定した。授業づくり、授業の進行としては理想的であるが、全ての要素を一時間の中に入れ込むことは、各教科、授業の進度や場面によって、特に道徳科、継続活動の多い生活科、総合的な学習などにおいては困難なのではないか、との声もあり、検討材料になっている（図7）。また、授業づくりにおける担任の負担も考慮に入れなければならない。



【図7 共有掲示板を用いた協議会の例】

「プラスONE」は日々の授業において意識し、設定していくものである。手だてありきでの授業づくりは本末転倒であることから、目標を達成するために、いつ、どこに、何を設定していくかの焦点化を図り、試行していきたい。今後の実践に向け、教職員全員で共通理解を図っていく予定である。